



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 295 号)

「覚馬とゆく」(2)

—— 女子教育 ——

おおしま ちゆうせい
大島 中正氏(同志社女子大学表象文化学部教授)



・山本覚馬邸跡

さる 10 月 7 日、わたくしは、同志社女子大学宗教部主催の「今出川歴史ツアー」のナビゲーターをつとめました。参加者は約 20 名。ほぼ全員が新入生でした。まずは同志社礼拝堂をたずね、覚馬の肖像画のそばでミニレクチャーをし、河原町三条(京都市役所の南側)にある山本覚馬邸跡へとむかいました。「山本覚馬・八重邸宅跡」という石碑が河原町御池南西の角にたっています。



38 山本覚馬・八重邸宅跡（京都市河原町御池南西角）

Site of the house where Kakuma lived with his family.

かつての住所表示は「上京 31 区下丸屋町 401 番地」。この住所こそ、覚馬とその同居人である新島襄とが連名で京都府の榎村権知事に提出した「私塾開業願」に明記している住所なのです。今年は、恒例の同志社墓地での礼拝が開催されませんでした。スポーツフェスティバルが予定されていた 10 月 28 日に学生支援課の「若王子ハイク」と称するイベントが開催されました。「若王子ハイク」と「今出川歴史ツアー」とに参加した学生は、覚馬ゆかりのスポットを 3 か所（二本松薩摩藩邸跡の同志社礼拝堂・河原町三条の覚馬邸跡・若王子の山本覚馬の墓）探訪したことになります。「今出川歴史ツアー」では『歴史街道』2013 年 4 月号（PHP 研究所）に掲載の「覚馬と幕末明治京都 MAP」を紹介しておきました。学生 1 か所でもおおく京都市内にある覚馬ゆかりの地をたずね、同志社ファンが 1 人でもおおくなればとねがいます。

・女子にも学問を

覚馬も新島襄同様、あたらしい国家を建設するには、教育が重要であると確信していました。『管見』をひもときますと、「学校」「女學」という項目があります。

次に「学校」と「女學」の現代語訳を提示します。

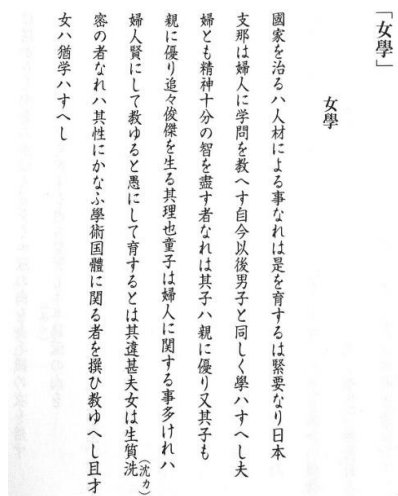
学校（原文は「學校」）

我が国が外国と肩を並べて文明の発達した国家となることは現在の急務であり、そのためには、まず人材を教育すべきである。については、京都や大阪近辺だけでなく、主要な港にも学校を開設し、博学の人を雇って教師とすべきである。学校では、古くて無益な書物を教えるのをやめ、国家に役立つ書物に親しませなければならない。

主たる分野は 4 種ある。第 1 は国家建設や『万国公法』の類を教える分野、第 2 は道徳

や倫理の分野、第 3 は司法に関する分野であり、第 4 は自然科学の分野であるが、その他に陸・海軍に関する学問も教えるべきである。

女子教育（原文は「女學」）



國家を治めるにはすぐれた人物が必要なのだから、人材の育成は緊急の要件である。日本や中国ではこれまで女性に學問を教えてこなかった。これからは男子と同様に、女子にも學問をさせねばならない。

両親が共に氣力が充実し思慮深い親であると、その子は親に優り、またその子も親に優る人物となって、やがては才能力共にすぐれた者が生まれてくるのは、当然のことだろう。子どもは女性と接することが多いので、賢明な女性が子どもを教えるのと、愚鈍な女性が育てるのとでは、雲泥の差がある。

女性は生まれながらにして沈着で配慮が行き届くので、その性質にかなう學問芸術や指示に関わる分野を選んで、教えるべきである。そのうえ、才能のすぐれた女性にはさらに學問をさせるべきである。

・人の平等と個の尊重

『同志社談叢』に 2001 年から 2014 年にかけて「山本覺馬覚え書」を 5 回にわたって発表され、私家版『山本覺馬建白（管見）』を 2014 年に公刊された竹内力雄氏は、「人の平等と個の尊重、これが「管見」を貫く理念である。」（『同志社女子大学史料センター叢書Ⅳ』 x ページ）とのべ、「女學」についても「ここまで徹底して男子と平等とする提唱は当時としては画期的な言説である。」（前掲書 x ページ）といわれています。

1869 年、日本でもっとも早期に誕生した京都の番組小学校では男女がともにまなぶことが奨励されたといえます。1871 年には、全京都の小学校の女子児童の中から岸田俊子ほか 2 名が選抜され外国語学校への入学が許可されました。これらは、いずれも覺馬の女子教育観のあらわれであり、1872 年の「新英学校及女紅場」の開設、そして 1876 年の「同志社女子塾」の開設も、女子教育を推進するという覺馬の方針の下、京都の地にいち早く

実現したのだといってよいでしょう。

・女性主導文明

同志社大学大学院商学研究科の修了生で神戸市外国語大学名誉教授の宮原一武氏に『女性主導文明が未来を救うー人類の文明史からー』（2004年、文芸社）という著書があります。

宮武氏は、「男女平等」でなく「女性主導」でなくては実質的な男女平等は実現しないと主張されています。みなさまには宮武氏のこの著作をぜひともご一読いただきたくおもいます。女性が主導する文明。それが人類の未来を救済する。そういう主張に対して、「女子教育は社会の母の母なり」ということばをのこした新島襄は、そして「女性は生まれながらにして沈着で配慮が行き届く」と洞察した山本覚馬はどう反応するのでしょうか。わが意を得たりとばかりにうなずくのではないのでしょうか。■